

【 復活トロパリ 第4調 】

しゆのおんなで し は ふくかつのひかるおと  
 主 女 弟 子 復 活 光 音  
 づれ を てんしより ききうけ えて、  
 天使 聞 受  
 げんそよりの ていざいをふる いすて、しと  
 原 祖 定 罪 を 振 棄 使 徒  
 にほこりてい え り、し は ほろぼさ  
 誇 日 死 滅  
 れ、ハリストスか み は ふくか つして、せかいに  
 神 復 活 世 界  
 おおいなる あわれみを たま え り。  
 大 憐 賜

【 日本の亜使徒ニコライのトロパリ 第4調 】

しととひとしく どうざな るもの、ちゅう  
 使 徒 等 同 座 者 忠  
 じつにしてしんちなるハリスト スのえきしゃ、せい  
 實 神 智 役 者 聖  
 なるしんに えらばれた るふえ、ハリストスのあい  
 神 撰 笛 愛  
 にみちた るうつわ、わがくにのこう  
 満 器 我 國 光

よ、なんぢのぼくぐんのため、および  
爾羊群爲及

ぜんせかいのため、いのちをたもうせい  
全世界爲生命賜聖

さんしゃにいのりたまえ。  
三者祈給

【日本の亜使徒ニコライのコンダク 第4調】

こうえいはちちとこおとせいしんにき  
光榮父子おと聖神歸

す、

せいせいしゃあしとせいニコライよ、わが  
成聖者亞使徒聖我

くになんぢをたびびとおよびいほうじんとうけ  
國爾旅人及異邦人受

しに、なんぢははじめわがくににおいておの  
爾初我國於己

れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストスの  
外來者知

ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて  
光暖かきをながし、爾敵

きをぞくしんのことなあし、かれらにか  
屬神子爲彼等神

みのおんちようをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて  
 恩寵 與 教 會 建  
 たり、いまこのきょうかいのためにいのり  
 今 此 教 會 爲 祈  
 たまあえ、けだしわれらそのしよしはなん  
 給 蓋 我 等 其 諸 子 爾  
 ちによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ  
 呼 我 善 牧 者 慶  
 べよ。

【 復活のコンダク 第4調 】

いまもいつうもよよに、アミン。  
 今 何 時 世 世 に、アミン。  
 わがきゆうせいしゅおよびしよくざいしゅはかみと  
 我 救 世 主 及 贖 罪 主 神 みと  
 して、ちにうまれしものをかせより  
 地 生 者 者 桎 梏  
 ときて、はかよりふくかつせしめ、  
 釋 墓 復 活  
 ちごくのもんをやぶりて、しゅさいとして  
 地 獄 門 破 主 宰  
 みっかめにふくかつしたまえり。  
 三 日 目 復 活 給

司祭) ( 黙誦： <sup>せい かみ せいじゃ うち いこ</sup> 聖なる神、 <sup>せいさん こえ もつ かしよう</sup> 聖者の中に息い、 <sup>せいさん こえ もつ かしよう</sup> セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
<sup>さんえい</sup> ヘルヴィムより <sup>ことごと</sup> 讚榮せられ、 <sup>てんぐん</sup> 悉くの天軍より <sup>ふくはい</sup> 伏拝せられ、 <sup>ばんぶつ む ゆう</sup> 萬物を無より有と  
<sup>ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ</sup> なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、  
<sup>ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す</sup> 願う者に智慧と明悟とを與え、 <sup>そのすくい ため つうかい</sup> 罪を行 う者を棄てずして、其救の爲に痛悔  
<sup>た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい</sup> を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な  
<sup>さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの</sup> る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と  
<sup>しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ</sup> なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を  
<sup>もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ</sup> 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と  
<sup>せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい</sup> を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる  
<sup>しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ</sup> 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) 蓋 <sup>けだしわ かみ なんぢ せい</sup> 我が神よ、 <sup>われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ</sup> 爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世  
に、



【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる  
 聖 神 聖 勇 毅 聖  
  
 じょうせいのものよ、われらをあわれめ  
 常 生 者 我 等 憐  
  
 よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい  
 聖 神 聖 勇 毅 聖  
  
 なるじょうせいのものよ、われらをあわれ  
 常 生 者 我 等 憐

めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、  
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ  
 れめよ。こうえいはちちとこせいしん  
 にきす、いまもいつもよよに、アミン。  
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ  
 れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう  
 き、せいなるじょうせいのものよ、われらを  
 あわれめよ。

司祭) ( 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國  
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、 )

【 プロキメン 提綱 主日第4調 】

司祭) 慎みて聴くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、爾の工業は何ぞ多き、皆智慧を以て作り、

しゅ よ 、 なんぢの しわざは なんぞお お き 、  
 主 爾 工業 何 大  
 み な ち え を も っ て つ くれ り 。  
 皆 智 慧 以 作

誦經) <sup>わ たましい</sup>我が <sup>しゅ ほ あ</sup>靈よ、主を讃め揚げよ、<sup>しゅわ かみ なんぢ いた おおい</sup>主我が神よ、爾は至りて大なり、

しゅ よ 、 なんぢの しわざは なんぞお お き 、  
 主 爾 工業 何 大  
 み な ち え を も っ て つ くれ り 。  
 皆 智 慧 以 作

誦經) <sup>しゅ なんぢ しわざ なん おお</sup>主よ、爾の工業は何ぞ多き、

み な ち え を も っ て つ くれ り 。  
 皆 智 慧 以 作

【 <sup>アポストロス</sup>使徒經 203 端 ガラティヤ書 2 章 16 節～20 節 】

司祭) <sup>えいち</sup>睿智、

誦經) <sup>せいしと</sup>聖使徒パヴェルがガラティヤ人<sup>じん たつ</sup>に達する書<sup>しよ よみ</sup>の讀、

司祭) <sup>つつし き</sup>謹みて聽くべし、

誦經) <sup>けいてい</sup>兄弟よ、<sup>ひと りっぼう</sup>人は律法の<sup>おこない よ</sup>行に由るに非ず、<sup>あら ただ</sup>唯イイスス・ハリストスを<sup>しん よ</sup>信ずるに由りて義と

<sup>し われら</sup>せらるるを知りて、<sup>しん</sup>我等もハリストス・イイススを<sup>しん よ</sup>信ぜり、ハリストスを<sup>りっぼう</sup>信ずるに由り、律法

<sup>おこない よ</sup>の行に由らずして、<sup>ぎ</sup>義とせられん爲なり、<sup>ため</sup>蓋<sup>けだしりっぼう</sup>律法の行に由りては、<sup>おこない よ</sup>人<sup>ひとひとり</sup>一も義とせ

<sup>も われら</sup>らるるなし。若し我等ハリストスに<sup>よ</sup>由りて義とせられんことを<sup>もと</sup>求めて、<sup>みづから</sup>自も猶罪人<sup>なおざいにん</sup>たらば、

<sup>あに</sup>豈ハリストスは罪の役者<sup>つみ えきしゃ</sup>たるか。非<sup>しか</sup>らず。蓋<sup>けだしも</sup>若し我が<sup>わ</sup>毀ちたる者<sup>こぼ</sup>、<sup>もの</sup>我復<sup>われまたこれ</sup>之を<sup>た</sup>建てば、

<sup>すなわちおのれ</sup>則<sup>ざいにん</sup>己の罪人<sup>しめ</sup>たるを示すなり。我<sup>われりっぼう</sup>律法に<sup>よ</sup>由りて律法の爲<sup>りっぼう</sup>に死せり、<sup>ため</sup>神の爲<sup>し</sup>に生<sup>かみ</sup>きん

<sup>ため</sup>爲なり。我<sup>われ</sup>ハリストスと<sup>とも</sup>共に<sup>じゅうじか</sup>十字架に<sup>てい</sup>釘せられたり。既に我<sup>す</sup>生くるに<sup>われい</sup>非ず、<sup>あら</sup>即<sup>すなわち</sup>ハリス

われ うち い わ いまにきたい あ い われ あい わ ため おのれ す  
 トスは我の中に生くるなり。我が今 肉体に在りて生くるは、我を愛して我が爲に 己を捨て  
 かみ こ しん よ い  
 し神の子を信ずるに由りて生くるなり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳)

兄弟たちよ。わたしの心の願い、彼らのために神にささげる祈は、彼らが救われることである。わたしは、彼らが神に対して熱心であることはあかしするが、その熱心は深い知識によるものではない。なぜなら、彼らは神の義を知らないで、自分の義を立てようと努め、神の義に従わなかったからである。キリストは、すべて信じる者に義を得させるために、律法の終りとなられたのである。モーセは、律法による義を行う人は、その義によって生きる、と書いている。しかし、信仰による義は、こう言っている、「あなたは心のうちで、だれが天に上るであろうかと言うな」。それは、キリストを引き降ろすことである。また、「だれが底知れぬ所に下るであろうかと言うな」。それは、キリストを死人の中から引き上げることである。では、なんと言っているか。「言葉はあなたの近くにある。あなたの口にあり、心にある」。この言葉とは、わたしたちが宣べ伝えている信仰の言葉である。すなわち、自分の口で、イエスは主であると告白し、自分の心で、神が死人の中からイエスをよみがえらせたと思ふなら、あなたは救われる。なぜなら、人は心に信じて義とされ、口で告白して救われるからである。

\*\*\*\*\*

【 アリルイヤ 主日第4調 】

司祭) <sup>なんぢ へいあん</sup> 爾に平安、

誦經) <sup>なんぢ しん</sup> 爾の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) アリルイヤ、

アリル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、

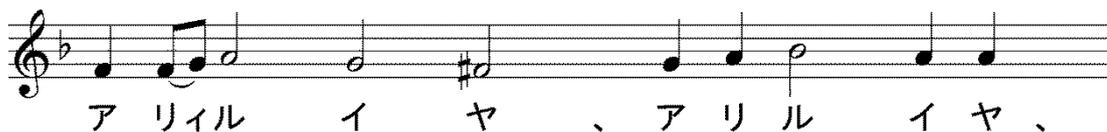
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) <sup>かみ なんぢ ほうぎ よよ あ なんぢ くに けんべい せいちよく けんべい</sup> 神よ、爾の寶座は世世に在り、爾の國の權柄は正直の權柄なり、

アリル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、



誦經) <sup>なんぢ ぎ あい ふほう にく</sup> 爾は義を愛し、不法を惡めり、



司祭) ( 黙誦: <sup>ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん</sup> 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の 淨き光を輝かし、我が思念

<sup>め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ</sup> の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる 誠を

<sup>おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ</sup> 畏るる 畏をも入れて、我等が 悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

<sup>おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ</sup> を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

<sup>なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいぜん</sup> 爾は我が 靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

<sup>いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ</sup> て生命を施す 爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。 )

【 エヴァンゲリオン 福音經 ルカ福音書83端 16章19～31節 】

司祭) <sup>えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん</sup> 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) <sup>でん せいふくいんけい よみ</sup> ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) <sup>つつし き しゅ さ たとえ もう い と ひと むらさきのうわぎ ほそきぬの</sup> 謹みて聴くべし、主は左の譬を設けて曰えり、富める人あり、紫袍と細布と

き ひびおご たのし またまづ もの な ぜんしんしゅもつ や と ひと  
 を衣、日日奢り樂めり。亦貧しき者ラザリと名づくるあり、全身腫物を病みて、富める人  
 もん ふ そのしょくたく お くづ もつ はら み ほつ いぬ きた そのしゅ  
 の門に臥し、其食卓より遺つる屑を以て、腹を果たさんと欲せり、犬も來りて、其腫  
 もつ ねぶ まづ ものし てんしら よ ふところ おく と もの し  
 物を舐れり。貧しき者死して、天使等に因りてアヴラアムの懷に送られ、富める者も死  
 して 葬られたり。地獄の苦の中に在りて、彼其目を擧げて、遙にアヴラアム及び其  
 ふところ あ み すなわちよ い ちち われ あわれ つかわ  
 懷に在るラザリを見たり。乃呼びて曰えり、父アヴラアムよ、我を憐み、ラザリを遣  
 そのゆび さき みづ ひた わ した ひや けだしわれこ ほのお うち くるし しか  
 して、其指の尖を水に蘸して、我が舌を涼さしめよ、蓋我此の燄の中に苦む。然  
 れどもアヴラアム曰えり、子よ、爾は存命の時爾の善を受け、ラザリは同じく其惡を  
 う おも いまかれ ここ なぐさ なんぢ くるし ただこれ なんぢら われら  
 受けたりしを憶え、今彼は此に慰み、爾は苦む。第此のみならず、爾等と我等と  
 あいだ おおい ふち かぎ ゆえ ここ なんぢら わた ほつ もの あた かれ  
 の間に巨なる淵は限り、故に此より爾等に涉らんと欲する者は能わず、彼より  
 われら わた え きれい しか ちち こ わ ちち いえ つかわ けだしわれ  
 も我等に渉るを得ず。彼曰えり、然らば父よ、請う、ラザリを我が父の家に遣せ、蓋我  
 ごにん きょうだい くれ そのまえ しょう な くれら こ くるしみ ところ きた  
 に五人の兄弟あり、彼をして其前に證を爲さしめよ、彼等も此の苦の處に來ら  
 ざらん爲なり。アヴラアム之に謂う、彼等にモイセイ及び預言者あり、之に聴くべし。彼曰  
 いな ちち しか も し うち くれら ゆ もの くれら かい かい  
 えり、否、父アヴラアムよ、然れども若し死の中より彼等に往く者あらば、彼等悔改せん。  
 い も およ よげんしゃ き たと し ふくかつ もの しん  
 アヴラアム曰えり、若しモイセイ及び預言者に聴かずば、縦い死より復活する者ありとも信  
 ぜざらん。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳)

ある金持がいた。彼は紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮していた。ところが、ラザロとい  
 う貧乏人が全身でき物でおおわれて、この金持の玄関の前にすわり、その食卓から落ちるもので飢えを  
 しのごと望んでいた。その上、犬がきて彼のでき物をなめていた。この貧乏人がついに死に、御使た  
 ちに連れられてアブラハムのふところに送られた。金持も死んで葬られた。そして黄泉にいて苦しみな  
 がら、目をあげると、アブラハムとそのふところにいるラザロとが、はるかに見えた。そこで声をあげ  
 て言った、『父、アブラハムよ、わたしをあわれんでください。ラザロをおつかわしになって、その指先  
 を水でぬらし、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの火炎の中で苦しみもだえています』。ア  
 ブラハムが言った、『子よ、思い出すがよい。あなたは生前よいものを受け、ラザロの方は悪いものを受  
 けた。しかし今ここでは、彼は慰められ、あなたは苦しみもだえている。そればかりか、わたしたちと  
 あなたがたとの間には大きな淵がおいてあって、こちらからあなたがたの方へ渡ろうと思ってもできな  
 いし、そちらからわたしたちの方へ越えて来ることもできない』。そこで金持が言った、『父よ、ではお  
 願ひします。わたしの父の家へラザロをつかわしてください。わたしに五人の兄弟がいますので、こん  
 な苦しい所へ来ることはないように、彼らに警告していただきたいのです』。アブラハムは言った、『彼

らにはモーセと預言者とがある。それに聞くがよかろう』。金持が言った、『いえいえ、父アブラハムよ、もし死人の中からだれかが兄弟たちのところへ行ってくれましたら、彼らは悔い改めるでしょう』。アブラハムは言った、『もし彼らがモーセと預言者にとに耳を傾けないなら、死人の中からよみがえってくる者があっても、彼らはその勧めを聞き入れはしないであろう』。

\*\*\*\*\*

しゆよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
主光榮爾歸し、こうえい  
主光榮  
はなんぢにきす。

※聖体礼儀③（金ロイオアン聖体礼儀）へ